

エコたま グリーン NEWS



多摩市民環境会議機関紙 第118号(通巻第178号)
2014年2月6日発行 発行人:清水武志朗 編集人:
井上ひさかず 〒206-0025 多摩市永山 3-9 東永山
複合施設 301 tel&fax 042-376-4572(事務局員は常
駐しておりません) e-mail qqh43fdd@train.ocn.ne.jp
URL http://ecomeetingtama.blog.ocn.ne.jp

環境セミナー最終回は「循環型社会の実現」



終了後に全員で記念撮影 中央が阿部市長

今期、合計6回開いた「環境学習セミナー」の最終回(7回目)は2月1日、多摩循環型エネルギー協会の大木貞嗣理事による「循環型再生可能エネルギーづくりを市民の手で」と題する講演が行われた。会場はこれまで多くセミナーが行われた市立グリーンライブセンター。受講者は、修了生全員の17名だった。講演のあと、セミナーの修了式が行われ、全員に阿部裕行市長から修了証が手渡された。

大木講師の講演内容



事業内容を語る大木講師

12年5月に旗揚げした「多摩市循環型エネルギー協議会」の発足のきっかけは、11年3月11日の東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故だった。それが起こる以前の市民活動の意思表示として

署名、カンパ、デモなどがあつたが、形のあるもの、仕組みなどを次代に残すのに自分たちでできることは「市民発電所」ではないかと考えた。エネルギーを遠い地域の原発などに依存するのではなく、地域での「地産地消」を行うことを目指して。

その後、一般社団法人化し、12年9月には環境省の「地域主導型再生可能エネルギー事業化検討業務」に採択され、再エネ事業を支援する法律実務の会の水上弁護士や多摩市環境部長(行政)、多摩信用金庫(金融機関)、まちづくり専門家会議、首都大学東京教授、地域経営アドバイザー、日本財団経営支援グループ(有識者)、環境エネルギー研究所、三菱UFJリサーチコンサルティング(アドバイザー)、環境省地球環境局(オブザーバー)も交えての業務遂行に入った。

そして、多摩市内だけで事業を行うわけではなく、広く多摩全域を視野に入れて「多摩循環型エネルギー協会」に名称を変更するとともに、12年10月には事業主体となる「多摩電力合同会社」を設立した。3年間を初動期間としており、12年度



多摩市役所も事業を応援する

は発電目標値を30~50kWとし、第1号モデルは恵泉女学園大学の30kWを実現、13年度は目標は1000kWだったが、ゆいま〜る聖ヶ丘の56kW余と多摩市の公共施設11カ所で600kWの施設借用契約にこぎつけた。14年度は1000kW以上を目指している。15年度以降は自立した事業体として、事業の継続発展できる体制を構築することを3カ年事業の到達点と位置づけている。



→施設への設置工事

多摩市では「公共施設への太陽光発電設置については、市内全域の集合住宅、民間施設に太陽光発電を広げていくための“モデル”にするという方針」でこの活動をフォローしている。むしろ、実施後の検証を行い、市民に情報提供する予定。再生エネに関する大企業とこうしたコミュニティビジネスとの違いは、大企業は豊富な資金力、高い技術力、経営総合力があるものの、地域で上げたもうけは大半が域外に流出してしまう半面、地域ビジネスでは市民の高い理念があり、地域の人材ネットワークが活用できる、社会貢献・地域貢献になるうえ、得られた収入は地域内に循環する。



今年多かった子どもたちの踊り

多摩エネ協では、さらに次世代のリーダー育成プログラムに取り組んでおり、再生エネ・環境分野での「行動する人材」の育成に取り組んでいる。多摩地域中心に8大学17名の学生が所属し月1回、学生主体の地域アクションを通じた体験学習が行われている。こうしてみると、多摩エネ協や多摩電力の活動は、たんなる発電ビジネスだけではなく、次世代の人材の育成まで手がけ、名前のおお「循環型社会」を最終目標にしていることがうかがえるようだ。

地域ふれあいフォーラム 活況!

第7回地域ふれあいフォーラムは関戸公民館で1月26日に行われ、太鼓の連打で幕開けを告げた。子どもたちの元気の良いダンスや外国人のファッションショー、団体紹介など、広いパーティーの出し物が行われ、終日にぎわった。



今年多かった子どもたちの踊り

当会議関連では、ギャラリーでアースビジョンと連携した2月22~23日の「多摩エコ・フェスタ」の事前宣伝、省エネサポートデスクやまち美化推進協議会の啓発出展など、3方面の参加を行った。

7階と8階のほとんどの施設を使って行われ、入場者は4500人と1日ではこのフォーラムが始まって以来の人数を記録。

長く続けてきたことの「お返し」をようやく省エネサポートのブース手に入れられたようだ。なお、まち美化のブース(右写真)に訪れた人は幼児21人を含む218人だった。



考えてみよう！ 雨水とのつきあい方



屋井裕幸講師

2月1日に国分寺駅ビルにあるLホールで「第9回国分寺市環境シンポジウム」が開かれ、雨水貯留浸透技術協会(公益社団法人)の屋井裕幸部長が「気候変動と雨水とのつきあい方を考える」と題する講演を行った。その概略を以下に。

急速な都市化が、洪水や渇水といった都市の水問題に拍車をかけている。都市の発展は水の制御や管理に関する様々な工夫によって支えられているといっても過言ではない。具体的には上下水道や河川の整備なしでは都市機能を維持することはできない。しかし、気候変動の影響によるゲリラ豪雨や渇水などが頻発するようになり、従来の方式だけでは都市の水問題は解決できなくなった。

これまで、行政を中心として治水対策(対処療法的方策)や都市の水循環系の健全化(抜本的方策)に取り組んできたわけだが、これからは自分たち自身も積極的に雨と関わっていくことが求められている。

地上に降った雨水は地中にしみ込んだり、地表面を流れて排水路、下水道、小河川に流入し、さらに集まって大きな河川となる。土地の利用が進み、湿地や林地などの自然の土地が減ると、地上に降った雨の流出速度が速くなり、雨が降り出してからすぐに河川で洪水が発生したり、その流量も大きくなる。

とくに都市化が進んだ地域では道路は舗装され、豪雨だと雨水は側溝に流れ、建物の屋根に降った雨は雨どいから下水道に直行し、下水道から河川に流れ込み、その受け入れ能力を超えて浸水や洪水などが激しくなる。



小型の貯留タンク

このような現象を緩和するため、貯留タンクを設けて大雨の時に一時的にこのタンクに雨水をためておこうという考えがある。雨水の「貯留」という。また、せつかくためた雨水を流してしまうのはもったいないと、庭の植物にまくとか道路の打ち水にするとか、フィルターでゴミを除去すれば水洗トイレや洗濯に使うことも可能だ。

さらに雨水を地中に浸透させ地下水とし、できるだけ下水や河川に直接流さない「浸透」という手法もある。市街地では舗装道路や建物のため、自然の土が露出している部分が少ないので、雨水の地中浸透能力が衰え、地下水が低下し、湧水が涸れるケースが続出している。これらへの対策として建物からの雨水、道路の雨水排水を雨水枡(枡の側面にたくさんの孔があいていたり、底が抜けている)に入れて浸透させることも行われているし、舗装そのものが多孔質のアスファルトで「透水性舗装」といわれるものも普及している。

国の公共事業が削減され地方財政も厳しい現在、下水道整備や河川の改修などは事業費がかさむこともあって遅々として進まないが、貯留浸透施設は比較的安価に設置できるので個人レベルでも設置可能だし、条例により個人の施設設置をバツ

クアップしている市もある。

課題としては一つひとつの貯留浸透施設が小さいので数多く普及させることだが、毎年少しずつ設置していけば10年もたつと目に見える機能が現れ、浸水が減ったり湧

水が復活したりすることが期待できる。また、今回の大震災に照らして考えれば、各戸が雨水タンクを持っているということは、災害などの非常時にも心強いことであり、将来的には簡易浄化を行って飲料水にすることも考えられる。

「雨水の貯留、浸透及び利用」に関わる国・自治体・事業者・学界・市民団体によって設立された雨水ネットワーク会議という組織があり毎年1回、全国大会を行っている。2013年8月に仙台で行われた第6回大会で策定された大会宣言の一節を紹介する。

「雨の持つ価値」は多面的で、用水、地下水涵養、生態系、心と命、教育、資源、文化などなどその及ぼす範囲は広範です。私たちの目指すこれからの街とは、資源循環、省エネルギーや自然環境、生態系に配慮された街、健康で持続可能な様々な暮らし方ができる街、そしていざという時の備えもできた安全で安心な街です。

そこは自然に対する謙虚さや物を大切に作る心、郷土愛や感性が生まれ、自慢できる街です。遊び心があって、面白くて好きになる街です。

大人から子どもまでが、行政と市民・町内会・NPOと学校が、さらに行政の各分野を横断して、多くの人たちが一緒になって雨について考え、「雨の多面的な価値」「新しく発見した価値」を生かした街づくり、水辺が身近に感じられ新しい水文化が育まれる街づくりの共通の目標像を探し、協働しながら今後の街を育んでいきます。

大栗川で5期目の改修工事

大栗川では昨年9月から東寺方小学校前の対岸で緑化のための改修工事が行われている。前回まで行われていた東寺方橋のやや上流から明神橋までの長さ205m区間。工事の主な内容は、護岸工事、管理用通路工事、階段設置工事、芝張り工事などで、もう階段はでき、桜の木も植えられている。

工事にはリサイクル材も使われているようだが、護岸1mをつくるのに約65万円かかっているそうだ。工事の終了は3月中旬とのことだが、現状の進捗具合をみればもっと先に延びそうな気配。

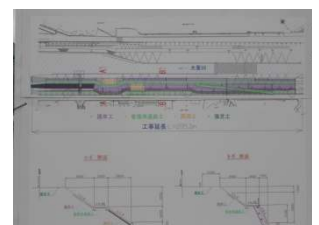
いずれにしる、宝蔵橋までは次の工事で到達するだろう。工事の主体は東京都南多摩東部建設事務所、工事業者は(有)今村組。



多摩市にもある補助制度



東寺方小の対岸で工事が進行中



工事の見取り図、上が小学校

